

「ダイバーシティ」実現のために努力すべきこと

ー海外勤務経験を通して感じたことー

What I try harder to realize the diversity in our work circumstance,
based on my work experience in overseas

田 中 洋 輔 (たなか ようすけ)
東亜建設工業(株)技術研究開発センター 主任研究員

1. 「ダイバーシティ (Diversity)」という言葉 を耳にして？

日本から帰国して久々に富山で開催の地盤工学研究発表会(2013年7月)に参加し、ダイバーシティ委員会主催の「サロン・土・カフェ」に初めて参加しました。そこで、多くの女性技術者と技術以外の面で色々なお話をさせていただく機会を得ました。私にとっては、貴重な機会であり、大変有意義な時間でした。

その話の中で「ダイバーシティ」という言葉を耳にして、最初は何のことかよくわかっていませんでした。辞書やインターネットで検索すると「多様性」とのことで、男女、人種、宗教の隔てなく、平等に働くことのできる社会を意味すると理解しました。

しかし、つい最近まで海外で人種、宗教の異なる数多くの人々と一緒に勤務した経験した私の感覚では、ダイバーシティは当然の概念であると思っていました。そのため、日本でも当たり前のこととして実現すべきことであると考えています。

私の勤務したシンガポールでは華人、タミル人、マレー人をはじめとした多くの人種が、男女分け隔てなく集まって仕事をしている社会であり、「ダイバーシティ」という概念は、ごく当たり前の概念と感じていました。だから、「ダイバーシティ」という概念について今ひとつピンとこなかったのだと思いました。

2. 地盤工学との出会い

ここでは、私の自己紹介を兼ねて、地盤工学との出会いから、現在に至るまでの経歴について紹介します。

2.1 地盤工学との出会い

地盤工学との出会いは、私が在学していた横浜国立大学の授業の中で、関西空港の地盤沈下の対策について特集しているテレビ番組(「テクノパワー」(NHK 製作))を視聴したときです。番組の中で、関西空港の沈下対策について真剣に取り組む土木技術者の姿勢に強い印象を受けました。これが、地盤工学と出会った瞬間だったと思います。そして大学の研究室の選択では、迷うことな

く地盤研究室を選択しました。研究テーマも粘性土の圧密を選び、故今井五郎横浜国立大学教授のもと、地盤工学との付き合いが始まりました。

2.2 これまでの職場での経験

2004年の春に現在の職場に入社し、地盤改良、固化処理土、軽量土の研究開発に取り組みました。特に、羽田空港の再拡張事業で、SGMという軽量混合処理土の長期耐久性等の品質について取り組み、現場と密接にリンクしながら、軽量土地盤の建設に携わりました。SGMの地盤がだんだんと出来上がっている過程をみると、モノづくりの醍醐味を改めて実感しました。

そして2008年4月からの5年間は、シンガポールの現場に勤務しました。私の海外現場の主な業務は、地盤構造物の設計、積算、地盤調査が中心でした。ただし、職場環境は日本と大きく異なり、写真-1で示すようにスリランカ、フィリピンといったアジア各国から集まったエンジニア、ワーカー達が私の部下となって一緒に仕事をしました。それは、まさに多国籍な環境でした。母国語が異なる者同士で、つたない英語でコミュニケーションをはかり、時には絵を描いて指示を出し、業務を遂行しました(写真-2参照)。

2013年4月に日本に帰国し、技術研究開発センターに復帰し、現在は工法開発、現場支援、技術指導、対外発表の業務に従事しています。



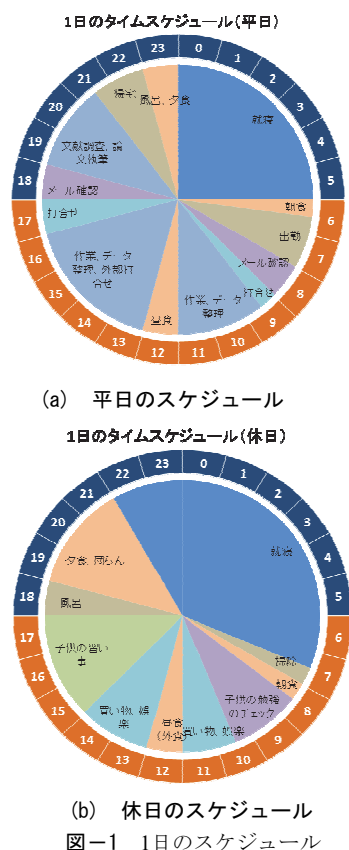
写真-1 私の職場の仲間との写真



写真-2 海外現場での現場作業員への指示の様子

3. 普段の生活状況（1日のスケジュール）

現在の私の1日のスケジュールを図-1に示します。



3.1 平日の過ごし方

平日は朝8時までは会社へ出勤します。日中の業務は、実験作業、データ整理、報告書作成等ありますが、本社に向いての打合せ、外部とのミーティング等で外出することが結構多いです。また工事現場に向き、品質管理業務や技術指導を行ったりすることもあります。夏場に現場に行くと、すぐ日焼けして顔は真っ黒になります。夕方に職場に戻り、メールチェックや残務の処理、論文作成等の業務を行い、夜遅くの帰宅となります。通勤の時間中は、スマートフォンで英語を聞く、読む等の勉強や、読書をしています。

3.2 休日の過ごし方

休日は、掃除等の家事の手伝い、買い物の荷物持ち、子供の勉強のチェック、子供の習い事の付添などです。特にこれといった趣味はないのですが、学生時代から旅行が好きなので、いつか時間を作ってどこか家族で旅行に行きたいと考え、インターネットで調べ、旅行の計画を練ったりします。

趣味というわけではないのですが、家計簿をつけることにはまっています。妻から言われ、エクセルで家計簿のシートを作り、毎週末、私と妻のレシートをかき集め、毎週の出費をチェックしています。シンガポールにいる頃から始め、現在も続いています。おかげ様で、家計の支出の状況がはっきりとわかるようになりました。

4. 海外と日本の勤務・生活状況の違い

日本での「ダイバーシティ」の現状に対する問題点を身近に感じるために、シンガポールと日本の身の回りの勤務状況の違いを比較してみました。以下の通りです。

(1) 休暇の取得について

日本人と比較して、シンガポールで勤務している日本人以外の人は、休暇を積極的に取得しています。年次休暇や病欠等は法律上、権利として付与されているため、皆その権利を行使します。一方、日本人の休暇取得は、ほぼ暦通りに休みを取り、有給休暇を権利として有効に取得できていないと個人的には思います。私も、日本への一時帰国以外は、ほぼ暦通り、ゴールデンウィーク、お盆、正月もなく勤務しました。ただし、子供の行事がある場合は、休暇を取って、積極的に行事に参加しました。写真-3はシンガポールの日本人小学校の娘の入学式の時の写真です。



写真-3 シンガポールの小学校の入学式にて

(2) 勤務の中での男女の違い

シンガポールでは、男女分け隔てなく働いていると感じました。女性の場合は、出産・育児にかかわる休暇取得が発生する以外は、男性と同様に仕事をしていると感じています。マネージャーが女性であることは、別段不思議なこととは感じません。日本でも女性土木技術者（ドボジョ）が注目され始めてきていますので、日本も同じようになってきているとは思っています。

女性が働く上で重要な事項は、家事・育児への対応だと思います。シンガポールの場合、共働きの家庭の多くは外国人のメイドを雇って対応します。メイドは、フィリピン人、インドネシア人の方が多いです。家事・育児をメイドに任せています。

日本でも、子供を託児所や保育園に預けたりする家庭が多いと思いますが、保育所の不足等でなかなか大変な思いをしていると思います。

私の妻も現在働いているのですが、男性も育児のために休暇を取るべきであると日頃から言われています。その言葉に対して、私はなかなか実践できていません。

(3) 人種、宗教の違いに対する対応

シンガポールで生活しているときは、申込書等で個人情報を入力する欄に、国籍、人種、宗教を記載する欄が必ずあります。シンガポールではごく当たり前のことでも、日本人の私にとっては、はっと思う瞬間でした。宗教に関して、全然認識がなかったことに気づきました。

シンガポールでは、キリスト教、仏教、イスラム教、ヒンドゥー教を祝した祝日が設定され、多民族に配慮がなされています。それに比べて、日本では、そのような配慮はありません。食事に関しても、イスラム教徒が食べることのできる食品を示すハラール（HALAL）のマークの付いた食品は、輸入食材以外では、日本ではあまり見かけることはありません。

最近では、円安の影響もあって、海外から観光で日本に来日する外国の方を多く見かけます。それに対して、食事の面で宗教に配慮できているかという点、まだまだのような気がします。

5. 普段から心がけていること

シンガポールでの生活では、まさに「ダイバーシティ」な社会の中での生活でした。そして、日本の生活の中でも「ダイバーシティ」という概念は、より身近にする必要があると感じています。そのために、私個人としては、以下の点を心掛けています。

(1) 相手の風習・文化・歴史等を理解する。

日本とそれ以外の国であれば、文化・風習が異なるのは当然のことです。日本では、お辞儀が大切ですが、海外では握手が大切だったりします。それ以外にも、宗教上、左手で握手することは失礼、指で人を指してはいけない等、たくさんあるのですが、相手の風習を理解することが大切です。

また、歴史的な背景を知ることが大切です。シンガポールには日本の占領時代の遺物などが残っていたり、シンガポールの国立博物館には日本の占領時代の歴史の詳細な展示があったりします。これらを見学して、日本が第二次大戦中にシンガポールを占領していたことに無知であったことに気づきました。それをきっかけに、相手の文化、歴史について興味を持って調べるようになりました。本やインターネット、新聞で調べ、相手のことをよく知ろうと思いました。

逆に日本についての記述を見て、相手が日本についてどのように感じているかを知ることができました。特に印象的だったのが、「日本は超高齢化社会に突入している」と、新聞記事を読んだ時です。日本の社会を冷静かつ正確に捉えていると感じました。

相手を受け入れるためには、相手のことをよく勉強することが大切であると感じました。

(2) 自分の主張を明確に述べる。

日本人の議論では、互い歩み寄るため、お互いに言いたいことを直接的に言わず遠慮しがちになることが多いのですが、他の国の人との議論では、自分の主張をはっきり述べるのが、物事を進める上で必要です。ある局面では、お互いの主張がぶつかり、口論になることもありましたが、すぐ熱くなったりして、注意されることもよくありました。しかし、言いたいことを述べると、相手も言いたいことを述べ、相手の本音も理解でき、相手の欲することが良くわかるようになりました。そうすると、お互いの歩み寄れる妥協点も見えてきて、相手が理解できるようになりました。

自分の主張をはっきりさせることは、逆に相手の言い分も良くわかり、非常に良いと感じました。家でも、夫婦げんかはよくあるのですが、相手の言い分も聞き、自分の主張をはっきり述べ、お互いの意思疎通を図っています。

(3) コミュニケーションツールを磨く。

日本に戻り、英語は他国の人とコミュニケーションするうえで、非常に大切と感じました。だから、日本に帰国してからも、英語を使い続けることを心掛けています。SNSのサイトを利用して英語で連絡を取ったり、英語のWEBサイトを読んだり、常に英語と接する機会を絶やさないように努めています。「英語がペラペラ」になるとは思っていますが、少しずつ積み重ねていくことが大切であると感じています。

6. ダイバーシティ実現に向けて本当にすべきこと

最後に、「ダイバーシティ」の実現のために本当にすべきことは、可能な限り家族との時間を多く作り、家事を分担し、女性への負担をなくしてあげることだと思っています。

シンガポールでは、夜10時くらいの遅い時間帯に、家族連れでショッピングや食事を楽しんでいる姿をよく見かけました。私は、子供が夜遅くまで起きていることは良くないと思っているので、不思議に思っていました。しかし、シンガポールの共働きの家庭にとっては、夕方以降が家族と楽しむ大切な時間であると聞いたことがあります。これを聞いて、家族との時間の作り方に色々なやり方があることを理解しました。

これが「ダイバーシティ」実現のための私のすべきことと感じています。

(原稿受理 2015. 3. 30)